

開山無相大師六五〇年遠諱

大本山妙心寺へ報恩の団体参拝

開山無相大師六五〇年遠諱の本山団体参拝を、11月13日に行いました。参加者は、松禪寺花園会より30人、桂昌寺花園会より8人、そして住職の計39人の参加でした。

午前9時半頃に本山は花園会館に到着、本庵である龍泉庵に向かいました。老師様のお話を拝聴し、書院でお菓子と抹茶をいただきました。通常は拝観ができない塔頭の一つであり、貴重なお参りとなりました。

第28号 石室山松禪寺 2007年(平成19年)12月25日

因みに、今日の妙心寺の再興の祖と言われる雪江宗深禪師(一四〇八〜一四八六)さまの門下から4人の宗匠が出られ、妙心寺の中にそれぞれ龍泉庵、東海庵、靈雲院、聖沢院の四庵をかまえ妙心寺の四派と称されました。この四派がそれぞれの本庵を本拠として地方に展開して、「四派本庵制度」を確立し、これにより教団は急速な発展を遂げま



した。(本山花園会本部発行「花園Q&A」より)

妙心寺派の寺院は、この四派のいずれかを法源としています。松禪寺と桂昌寺の本庵は龍泉庵となります。

続いて、明智光秀の菩提を弔う

ために創建された明智風呂を拝観しました。昔のお風呂で蒸し風呂です。午前10時半からは、微妙殿において法要が執り

行われました。開山無相大師さまのお像が祀られているこの会場では、特別塔婆諷経も行われ、また、団体参拝への参加が5回目および10回目となった檀信徒の皆さんに表彰状および記念品が授与されました。

お昼は、嵯峨野の清涼寺にある「竹仙」にて湯豆腐などをいただきました

きました。その後、嵯峨釈迦堂といわれる五台山清涼寺を拝観、続いて、龍安寺にも足を運びました。ここでは普段拝観できない仏殿に入れていただき、みんなで般若心経をお唱えしました。

最後は、お決まりのお土産買い物タイム。帰りを待つ家族や職場の皆さんへ、きょうのお参りのお陰のお裾分けと、皆さんしっかり買い込みました。希望があれば、ぜひ来年もお参りしたいものです。

天下秋なり

大本山妙心寺派常任布教師

足立宜了師 (正覚寺ご住職)

こんにちわ。

皆さま方には、平成二十一年に迎える妙心寺開山、無相大師さまの六百五十年の大法会に先立ち、遠諱団参にご参詣いただきまして。先ず以て御礼申し上げます。

開山さまが、八十四年のご生涯を閉じられる折り、その最期を看取っておられたお弟子さんに向けて遺された最期の教えが「ご遺戒」

です。ご遺言の戒めです。その中に「請う其の本を務めよ」との言葉があります。

この言葉は、みんなが幸せになるために、私はどういう生き方をしたらよいか。このいのちをどう活かしていったらよいかを問いかける開山さまの私たちに向けての願いのお言葉であつたらうと思ひます。

落ち葉

さて、日ごとに秋らしくなつて参りました。京都市内では、例年よりも遅れがちな紅葉でしたが、ここに来て朝晩の寒さに木々も赤く、黄色く染まり始めました。禅の言葉のひとつに

一葉（いちよう）落ちて

天下 秋なり

とあります。一枚また一枚と赤い葉っぱが舞っていきます。まさに無常の世界を目の当たりにしながら、それでも「天下 秋なり」と、現実があるがままそのままだに受け止める前向きな生き方を促す言葉です。

ここに「今を生きる」いのちの活かし方があります。過ぎ去った夏の勢いや、目を楽しませてくれた紅葉の時節を懐かしむことなく、寒々しく冬枯れしていくことに肩を落とすことのない禅の境地を観じます。

境内にて

お寺には、大なり小なりの境内があつて、訪れる人々を何かしらホッとさせてくれるものです

し、また、お寺とはそういうところではなくてはならないと思ひます。

そういうところではなくてはならないと思うから、夏の雑草、秋の落ち葉は気になります。落ち葉の今の季節、なかなか「天下 秋なり」と落ちて着いてはられないものです。

兼職をして寺を

護っていた師匠は、わずかな時間の合間をみては、庭の草引きや掃き掃除をしていました。檀家さんの法要に出かける直前にも、目につく雑草や落ち葉を片付ける人でした。

そういう師匠の姿を見ておきながら、

私自身はと振り返ると、雑草や落ち葉を気にしながらも、その場ですぐさま片付けることは、なかなかできないものです。出かける前に手は汚したくありませんし、汗はかきたくないものです。いつかやろう、できるときにやろうと、つい日延ばしにしがちなのです。草むしりや庭を掃き清めなけれ



ばならないことは、よくわかっています。わかっているから、いつも雑草や落ち葉のことが気に掛かって仕方がないのです。目についたときに、すぐさま片付けてさえいれば、何ら心の重荷にもならないのでしょうか、やらずにおいて気ばかりを焦らせているのです。焦るばかりに「一葉落ちて 天下 秋なり」と、秋の落ち葉の景色を楽しみむことすらできず「忙しい」と、愚痴ばかりを募らせてしまふのです。

それは、自らが自らを苦しめている姿です。雑草や落ち葉が、決して心の重荷の原因ではなかつたのです。そのときその場に、雑草や落ち葉に対処していれば、何ら心焦らせることもなく、あるがままの景色をそのままに楽しむことができようと思ひます。

開山無相大師さまが申された

「其の本」とは「天下 秋なり」と素直に領ける心であり、その心に務めよとは、今、やらねばならないことにどれだけ心身を委ねることができるか。その決断力と実行力と、そして素直さを育むことです。心に「あれもしないかん、これもしないかん」という重荷さえなければ、何でも素直に受け入れる余裕ができます。そこに「天下 秋なり」と、あるがままをそのままに肯定していける小さな歡びがあり、その積み重ねこそが、開山さまの願われた幸せというものであらうと思ひます。

これから、開山さまの六五〇年のご供養と皆さま方のご先祖さまのご供養が勤められます。このご供養によって、皆さま方の心も軽くなられることと思ひます。

どうぞ、このあとの坐禅、そして礼拝の時間を「天下 秋なり」と領ける心を養うひとときとしていただければと願ひます。

どうぞ、ご負担なきようお勤め下さい。

本日は、ご参詣賜り誠にありがとうございました。

成道会

じょうどうどうえ

12月8日は「成道会」(じょうどうえ)でした。これは、お釈迦様が35歳のこの日、菩提樹の下でついに「お悟り」を開かれ、仏陀(ぶつだ=覚者)となられたことを記念して執り行われる法会(ほうえ)のことです。

また、臨済宗の修行道場では、お釈迦様が明けの明星をご覧になつてお悟りを開かれたという故事にちなみ、12月1日から7日の未明までを一日とみなして、不眠不休で坐禅をする臘八大摂心(ろうはつおおぜっしん)を行います。托鉢(たくはつ)や作務(さむ)も、臨済宗の修行道場では、お釈迦様が明けの明星をご覧になつてお悟りを開かれたという故事にちなみ、12月1日から7日の未明までを一日とみなして、不眠不休で坐禅をする臘八大摂心(ろうはつおおぜっしん)を行います。

また、臨済宗の修行道場では、お釈迦様が明けの明星をご覧になつてお悟りを開かれたという故事にちなみ、12月1日から7日の未明までを一日とみなして、不眠不休で坐禅をする臘八大摂心(ろうはつおおぜっしん)を行います。托鉢(たくはつ)や作務(さむ)も、臨済宗の修行道場では、お釈迦様が明けの明星をご覧になつてお悟りを開かれたという故事にちなみ、12月1日から7日の未明までを一日とみなして、不眠不休で坐禅をする臘八大摂心(ろうはつおおぜっしん)を行います。



む/労働です)などは一切行わず、ひたすら坐禅三昧、徹底して坐り、寝る時間もほとんどない状態です。このように、お釈迦様の積まれた修行を今も綿々と伝え、実践しています。

当山では、出山釈迦図(しゅつさんしゃかず)を本堂内に掲げて読経いたしました。この図は、長い間の苦行荒行にもかかわらず悟りを得られなかったお釈迦様が、山から下りてこられた姿を描いたものです。やせ衰えながらも解脱を求める気迫が伝わる図です。この後、村の長者の娘スジャータの捧げる乳粥で体力を回復され、菩提樹の下に座し、瞑想に入られてお悟りを開かれたのです。

松禪寺の出山釈迦図は、享保18年(一七三三)狩野永峰作です。

市道松禪寺線 通行できます

昨年から工事されていた市道松禪寺線が完成しています。本城隣保の森下みどりさん宅と酒井敏則さん宅の間を通り抜けて、寺の駐車場へと道路がつながりました。お参りの節などは、ぜひご利用ください。



古仏巡りで来山

東京の(株)朝日旅行による「上原先生と行く新かんのんみちの旅」のご一行22名様が12月8日(土)の午前中に来山され、県重要文化財の薬師如来坐像ならびに当山のご本尊である延命地藏菩薩像などを見学されました。



東京の(株)朝日旅行による「上原先生と行く新かんのんみちの旅」のご一行22名様が12月8日(土)の午前中に来山され、県重要文化財の薬師如来坐像ならびに当山のご本尊である延命地藏菩薩像などを見学されました。

《ご案内》 除夜の鐘

行く年来る年、大晦日は除夜の鐘を撞いてみませんか。12月31日(月)の午後11時45分頃から撞き始めます。本堂、薬師堂へのお参りもできます。飲み物なども用意していますので、ぜひお参りください。

平成20年度

年忌法要のご案内

平成20年(二〇〇八年)に年忌法要を迎える霊位の歿年度は左記のとおりです。法要の実施日については、なるべく早めに寺へご連絡ください。

【平成20年度年回表】

- 1 周忌 平成19年歿(二〇〇七)
- 3 回忌 平成18年歿(二〇〇六)
- 7 回忌 平成14年歿(二〇〇二)
- 13 回忌 平成8年歿(一九九六)
- 17 回忌 平成4年歿(一九九二)
- 25 回忌 昭和59年歿(一九八四)
- 33 回忌 昭和51年歿(一九七六)
- 50 回忌 昭和34年歿(一九五九)
- 百回忌 明治42年歿(一九〇九)